

リポート
Report

大磯町郷土資料館だより

1998・8・15

17

もくじ

- | | |
|-------------------|----|
| ◇神奈川県のだんぞじんさい | 2 |
| ◇こうじあんない・しりょうのうじう | 12 |



講義記録

平成9年度の郷土史講座が、去る2月15日(土)に行なわれました。今回は『神奈川県のだ祖神祭』と題して國學院大学の小川直之さんに講義をお願いしました。折しも大磯町に伝わる民俗行事「左義長」が国の重要無形民俗文化財に指定され、民俗行事に対する関心が高まりつつあることから、今回の講義では各地に伝わる道祖神祭の民俗学的な意味とともに、「大磯の左義長」の位置付けも解いていただくことを目的としました。以下は講義内容をまとめたものです。なお、紙幅の関係上、講義にて併用した図表等は割愛しました。

神奈川県のだ祖神祭

小川直之

まずは、大磯町の方々が力を合わせて長らく伝えてこられました『大磯の左義長』が、国指定の重要無形民俗文化財になりましたことをお喜びしたいと思います。指定されたということは、「これから後世に向かってきちんと伝えて下さい」というようなものですから、地元の方々にとってはそれだけご負担が多くなり、また、今後も様々なご苦労があると思います。今年も特にダイオキシンの問題があって燃やすものが制限されたり、当事者の方々は目に見えないところで非常に多くのご苦労をされていただろうと思います。

さて、今日は道祖神のお祭りのことについて、神奈川県内全体、あるいはもう少し広く全国的なところで見ていったら、どのように特徴づけられるのかということをお話してみたいと思います。ただ、限られた時間内では、全体像を明らかにしてお話しするのは少々無理があります。本当ならば倍ぐらいは時間をかけませんと細かなところまではお話できないなと思っております。そのことを予めご了承願いたいと思います。

大磯町の道祖神祭につきましては、今までいくつかの調査報告あるいは実態報告が出ております。古い時代で申しますと、県教育委員会が昭和37年に新書判で『大磯のだ祖神祭』を出しております。これは今となってみますとたいへん貴重な資料です。昭和30年代の古老の方々、当時はおそらく明治10年代生まれの方々が中心です。おそらく明治ひと桁生まれの人もいらっしゃるのではないかと思います。そういう方々の体験にあるものをまとめておりますから古いことが伝承の中にあっただらうと思います。まさしく江戸時代末頃の様子が記憶の中にあっただけでいいのではないかと思います。これが最も古いものです。この他に町でおまとめになりました道祖神調査報告書というものが出ております。これは大磯町全体でどのくらい道祖神(石塔)があるのかということをもとめたものです。また、摘み草の会という学習グループのメンバー

の方々が『大磯のだ祖神』という本を3冊にまとめておられます。これには地図もついておりますし、周りの情景がどうであるとか、やはり地元の方々の感覚で丁寧によくおまとめになっております。こういうものをご覧になりますと、大磯町にどのような道祖神があるのかということはお分かりになると思います。なお大磯町では今、町史編さんがおこなわれ、その中で民俗調査報告書が4冊ほど刊行されています。大磯町で伝えられている様々な行事等については、その中に詳しく出ておりますのでご覧になっていただきたいと思います。

先程申し上げましたように時間があまりありませんので、さっそく皆さんのお手元に配りました資料に基づきまして話を進めたいと思います。道祖神祭、あるいは道祖神というものについては、民俗学の名かでも古くから重要なテーマのひとつとしてあげられているものです。柳田国男の著作の中にも、ずいぶん古い時代から道祖神のことについて取り上げたものがあります。ただ、研究の歴史は非常に長いのですが、道祖神という神がどういう神であるのか、あるいは道祖神祭というものがそもそもどういうものであるのかということについては、残念ながらまだ十分な決着がついておりません。たいへん多くの問題を抱えながら、まだ解明が十分ではないテーマのひとつであるということです。その意味では、今日、私の話の中に歯切れの悪い部分があると思います。そういう部分についてはまだ学問的に十分な解明がなされていないということでお考え下さればいいのではないかと思います。

まず最初に大磯町で道祖神石塔がどれほど祀られているのかということを見てまいりますと、大磯地区で27、国府地区で59、合わせて86基確認されています。全体で86という数字がどういうことを意味しているのかは、いろいろな見方ができるわけです。まず、道祖

神を祀る密度ということから言いますと、かなり高い密度を持っていると言えます。この建立の密度は何も大磯町だけではなく、隣の二宮町、平塚市、中井町、秦野市、大井町へ行っても大きくは変わりません。別の言い方をしますと、全国的に見ていって道祖神祭祀というものが非常に活発に行われているのが、神奈川県の県央南部だということに言えるということです。道祖神と言いますと信州が非常に有名ですが、さまざまな観点から調べてまいりますと、日本の道祖神祭、なかんずく双体道祖神といたしまして、2体の像を彫った道祖神、そういうものを祀っている最も中心的な地域がこの地域であると言えます。そのことをまず念頭においていただいて、次の話に移ってまいります。

それでは、大磯町の86の道祖神が歴史的に見ていっただらば、いつ頃のものから確認できるのかと申しますと年代の彫られたもので今のところ最も古いものが享保3年(1918)です。年代が分かるものが38あります。平塚や秦野でも見ていきますと、道祖神石塔のうち約50%、半分ぐらいのものに年代が刻まれているというのが平均的な数値ですが、大磯の場合はそれよりもちょっと低い数値になっています。

私は平塚市博物館在職中に、平塚市内の石仏を全部調べるのに12年かかりました。12年間、平塚市民の方々と歩きました。今、秦野で同じようなことをやっています。秦野でも、もう10年を超えており、秦野市内を全域歩き始めて3巡めになっています。テーマを変えて何回も何回も様々な場所を歩くのです。やはり自分の足でひとつひとつ歩いてみていきませんと実感がわきません。歩みはのろいのですが、その方が確実です。そういう意味で平塚や秦野の状況は頭に入っています、そういうものと比較すると、大磯で年代が分かるものは少々パーセンテージが低いかも知れませんが、密度の点でいいますとほぼ同じ程度です。平塚と秦野を比べますと秦野の方が密度が高いと言えます。秦野は江戸時代の村でいいますと30数か村あるのですが、そこに300ぐらいあります。ですからひとつの村に10ぐらいになります。平塚はもう少しで220~230。平塚は江戸時代の村が54か村ありますからもう少し密度がおちます。

さて、大磯で年代の分かる道祖神のうち、いちばん古いものが享保3年、東馬場の八幡神社の中に双体道祖神が祀られています。その次は国府新宿に享保5年(1720)のものが、やはり双体道祖神としてお祀りされています。3番目は延享3年(1746)のものが東小磯にお祀りされていて、やはり双体道祖神です。古い順番に3つほどみていきますと、いずれも双体道

祖神です。簡単に言いますと、舟型の塔に2体の像が彫られている、これが双体道祖神です。実は、この双体道祖神というものを全国で見えていくと極めて限られた地域にしかありません。大磯のほか、平塚、秦野、中井、大井、二宮でも同じで、道祖神は、江戸時代中期の古いものについてはほとんどが双体道祖神です。文字塔、つまり文字で道祖神と書いたものも江戸時代には作られ始めていますが、全体的な傾向としては双体像を持ったものが古いものとしては一般的な姿です。ですから、そういうことからすれば全国で見えていくと双体道祖神はかなり限られた範囲にしか出てこないということです。

私は平塚の生まれですが、地元で生まれて地元で生活をしていきますと、自分たちの知っていることが常識になっていますから、それが当たり前だと思ってしまう。ところが、そのことが実は全国的に見ていきますと、かなり特異なものであるということが多々あります。この双体道祖神もそうですし、別の例をいいますと、お盆のときに門口に砂を盛ったり土を盛って、そこで迎え火を焚く、盆のスナモリとかツジとかフジサンと呼んでいるものもそうです。私は自分の家でもやっていますから、こういう勉強を始めるまでは、どこでもやっているんだろうと思っていました。ところが、盆の砂盛りをやっているのは、神奈川県の県央部に東西にベルト状にあるだけです。津久井まで行きますとありません。三浦半島も行なっていません。それから一部静岡の掛川ぐらいいまで見られます。ですから、砂盛りをやっているらっしゃる方々は、自分たちの常識だと思っているのですけれども、全国的に見ていきますとかなり特異なものです。この双体道祖神も同じで、普段見慣れてますと当たり前のものですが、そのことをもう少し広い範囲で見えていきますと、これがかなり特異なものであるということが分かります。

それでは、双体道祖神がどういう地域にあるのかと言いますと、神奈川県では県西部です。藤沢と横浜の境に境川という川があります。境川という川はまさに国境の川です。武蔵の国と相模の国の境がどこなのかと言いますと、藤沢と横浜の境の境川です。おそらくこのことがひとつの大きな要素として存在しているのだらうと思うのですけれども、双体道祖神の分布を神奈川県内で見えていきますと境川の西側に非常に多い。境川から東へ行きますと少なくなります。例えば横浜市内で見ていきますと、旧戸塚区、今でいいますと泉区にはけっこうたくさんあるのですが、その他へ行きますとほとんど双体道祖神が出てこない。たとえあったとしても少ない。三浦半島でも双体道祖神は非常に

少なく、横須賀は確か0だったと記憶しています。

こう見てまいりますと、神奈川県内でも双体道祖神つまり江戸時代から作られている道祖神は非常に限られた地域にしかないんだということが出来ます。さらに小田原の西、例えば根府川あたりから西へ行きますと、丸彫りのお地藏さんが座ったような形の道祖神が出てきます。民俗学の世界では伊豆型道祖神と呼んでいます。ですから、境川付近から小田原あたりまでが双体道祖神の最もたくさんある地域です。大磯や平塚や秦野やこの地域でごく一般的に道祖神ということで記憶にある、あるいは親しんでいる双体道祖神というのは神奈川県内だけとってみても、かなり特異なものであることが言えるのです。

もう少し広い範囲で、つまり全国的にこの双体道祖神がどういう地域にあるかといいますと、静岡県東部の駿河、駿河でも内陸部にはあまりないのですが、三島や沼津などにはあります。伊豆も丸彫りの道祖神が多くなりますから、双体道祖神は極めて少なくなる。神奈川県西部から静岡県と、これは繋がっているのです。そして山梨県は、数は少ないのですが点在しています。

長野県で双体道祖神が多いのは諏訪と佐久です。安曇野ではありません。安曇野は観光パンフレットなどでたいへん有名ですが、安曇野の道祖神は別枠に考えておいて下さい。あれは新しいものです。古い年代が刻まれています、像容、ちょっと難しい言葉ですが、像の姿からいいますと、いずれも幕末から明治以降のもので、それに非常に古い年号が彫られているわけです。これがどういう意味を持つかは、まだ明確なことは分かっておりません。長野県で見えますと、双体道祖神ということで目立っているのが諏訪と佐久ですので、長野県では南東部にあって下さい。

さらに群馬県西部、ひとくちに吾妻郡と言っているのですが、群馬県の西部には双体道祖神があります。それと新潟県は西から上越、中越、下越と区分されていますが、中越地方に双体道祖神があります。上越、下越には双体道祖神は出てまいりません。今、明確に全国分布で分かっている双体道祖神の分布地域というのは、今申し上げた地域です。非常に限られています。この他に島根県の海岸部にあることはあるのですが、全国的に見て顕著に存在するのは神奈川県の西部から静岡県東部、そして山梨県、長野県の東部、群馬県西部、新潟県の中越で、ある程度分布のつながりといえます。ひとつの範囲があるということが、これでお分かりになっていただけたと思います。

こうしたなかで、年号をもった双体道祖神を調べてまいりますと、どこにいちばん古いのかあるかということ群馬県の倉淵村に寛永期のものがあります。そこに寛永期のものが一基ポツンとあるだけなんです。こういう場合、疑ってみなければいけません。なぜかといいますと、やっぱり古い時代から双体道祖神を作ることが一般的ならば、近い年代のものが複数あっていいはず。ところがポツンとひとつだけあるということは、現物を見ておりませんのではっきりしたことは言えませんが、現物をきちっと自分で確認するまでは、「まあ、これがいちばん古いと言われている」というぐらいしか言えないのです。ですからちょっとこれを除いておきますと、いちばん古い双体道祖神としては寛文9年(1669)のものが秦野市の戸川というところにあります。この地域では、実はこれひとつだけではないのです。中井町雑色に同じ年のものがあります。秦野市戸川と中井町雑色は離れているといっても、そんなではありません。さらにもう少し見てまいりますと、小田原市高田に寛文10年の双体道祖神が、大井町篠窪に寛文11年のものがあります。さらに中井町半分形にも寛文11年のものがあります。つまり、倉淵村みたいに寛永期のものがポツンとひとつあるというのではなくて、いずれもそんなに離れているわけはありませんので、この地域全体がこういう古い双体道祖神を伝えているということが出来ます。一基だけだと、これは説得力がありませんが、寛文期の道祖神がこれだけあると説得力を持てきます。隣の平塚市ではどうかと申しますと、いちばん古いものが元禄8年(1695)で、これは高根というところにあります。

こうなると、やはり神奈川県西部、つまり西湘地域の南部で、17世紀の半ば過ぎから道祖神というものが双体像をもって建てられ始めていることが分かります。つまり、道祖神というものを形に表す、石で彫って形に表して何らかのお祀りをするということが、この地域では少なくとも300年以上続いていると考えていいんだということです。こういう石塔が作られる以前はどうであったかということは、私たちは今あるものしか資料として使えませんので分かりませんが、確実に言えることは17世紀半ば以降に西湘地域の南部では、道祖神というものを2つの像を持った、双体の形として表してお祀りをはじめたということです。

さて、この双体道祖神を見てまいりますと、非常に大きな特色を持っています。先に申し上げた寛文・元禄期の双体道祖神というのは、舟型の石に2つの像が並んでおり、それはいずれも僧形で、合掌像です。お

地蔵さんみたいな形をして手を前に合わせています。地蔵というのは調べてまいりますと、石仏の場合は右手に錫杖、左手に宝珠というのが最も典型的なスタイルなのですが、寛文・元禄期の双体道祖神の場合は僧形合掌像です。これが石塔を見る限り次第に男女の区別が見られるようになります。特に1700年代以降になりますと男女の区別が明確になってきます。そして、幕末には例えば男と女がいて、一方がお銚子を持って一方が盃を持って肩を抱き合っている、2人で餅を搗いているというようなバラエティが生まれてきます。実は安曇野の道祖神というのは、このような幕末以降に現われる像容です。古い年号が彫ってあっても、像容から見るとその年代にはこのようなスタイルをとらないということが各地の道祖神を集めてみると分かってきます。ですから、安曇野の場合は、何らかの理由があって幕末あるいは明治に入って新しい姿のものを作って、そこへ古い年号を彫ったとしか考えようがないわけです。安曇野は観光地として有名になり過ぎて私たち日本人には道祖神といえば安曇野というようなイメージがあるのですが、実はそうではないということがお分りになっていただけないのではないかと思います。日本の道祖神といたら、全国的に見ると大磯町など県央南部地域なのです。もっと宣伝していいのではないのでしょうか。

それでは、なぜこの時代に、この地域に、こういうものが作られたのかが問題になります。これは分かりません。分かりませんなんて言葉を使ったらいけないのかも知れませんが、しかし実際にはまだ分かっておりません。ですから、興味のある方はこういうことをご研究していただきたいと思います。道祖神研究というのは、日本の中で見てまいりますと、非常に大きな研究テーマですので、なぜこの地域に双体像のものがこの年代に作られていったのかということが分かるとたいへん有り難いと思います。このようなことは古文書には残っておりません。何年何月にこういう理由でこういうものを作ったなどと、おそらく直接的な理由を示してくれている資料はないと思います。このような形で話をしていきますと、初めに言いましたように1時間半ぐらいで道祖神についてどのくらいの話ができるのかとなりますと、たいへん心許なくなります。地域的な状況として、まず石塔についてはお分りになっていただけたと思いますので次へ移ります。

さて、お手元の資料には、道祖神の呼称についての全国分布があります。これは、私と同じ研究室の倉石忠彦先生がおまとめになったものの中から拝借してま

いりました(倉石忠彦「いわゆる『道祖神』について」『國學院雑誌』98巻 8号)。それを見てまいりますと、ドウロクジン、ドウラクジン、サイノカミ、これはセーノカミと言ってもいいですね、それからフナト、あるいはサヤ、サヨというような名称で、全国で道祖神が祀られていることがお分かりになると思います。ここで、ひとつお気付きになることがあるはずですが。先程、私は石でできた双体道祖神の分布というのは、非常に限られた地域にしかないんだと申し上げました。つまり、双体道祖神は限られているけれども、道祖神的な神を祀るというのは分布図を見て分かるように、全国に広がっています。双体像以外の道祖神もあるわけですし、例えば茨城県へまいりますと石の祠型をしています。祠といっても、中にお札を納めたりするにはなっておりませんが、ここに道祖神と彫ったりしています。双体像は出てまいりません。あるいは東北地域にまいりますと、男根つまり男性の性器を木や石で作ります。岩手県あたりでは道祖神といえば男根型のものをお祀りしています。性器をかたどったものを祀るというのは、けっこうたくさんあります。当地域でも、秦野市今泉にはマラセの神という男根を模した大きなものがありますし、特に秦野市の西部では、男性器や女性器を石で模して作ったものを道端にお祀りしています。全国を見てまいりますと様々な形の道祖神というものがあって、西湘地域の南部だけが双体道祖神の分布が多く、この地域は特異な地域であるとみていいわけです。

さて、あらためて呼び名を見てまいりますと、分布図から明らかなことがいくつかあります。最も分布の広がりがあるのがサイノカミ、あるいはサエノカミです。当地域では訛ってセーノカミと言っています。セーノカミサンという呼び方が分布としたら最も広いことが分かります。西から見ていきますと、九州北部から中国地方、瀬戸内海沿岸の四国、そして近畿地方から中部地方、さらに北陸、東北地方へと広がっています。ですから、日本の中で道祖神というのは、セーノカミとかサエノカミという呼び方が広く行われているんだなと思っていわけです。

セーノカミ、サイノカミという言い方は、当地域でも、少し時代を遡ると道祖神という呼び名よりも一般的です。セーノカミとかサイノカミの方が古くからの言い方であることは、もうこれは明らかです。おそらく、文字というものを識別する力が国民全体についてきてから道祖神という名称が広がったと考えていいわけですが、この分布図には道祖神という名称は採用されていません。

それぞれの土地の固有の言葉としてはサイノカミ、サエノカミと言っているのが最も広いということです。そして、中部地方の山岳地帯から関東地方にかけてはドーロクジンという呼び名が顕著になっています。実は大磯でもそうですが、二宮、平塚、秦野でもドーロクジンという呼び名は、現在の私たちの言葉の中にはもう残ってないのではないかと思います。ただし、道祖神の石塔を見てまいりますと、「道陸」「道禄」というような文字は見ることができません。これは明らかにドーロクジンという呼び名が文字として素直に記されていったことを意味しているのではないかと思います。ややもすると、私たちは道祖神という文字に引っぱられてしまいますから、道祖神が訛ってドーロクジンとなったのかな、つまり「祖」が「陸」や「禄」になったのかなと思いがちなのですが、どうもこのような分布図をみますと、その逆のように考えられます。関東地方では、ドーロクジンという呼び名の方が一般的であった時代があるんだと考えた方がいいことになります。飛んで四国の高知県になぜドーロクジンという呼び名が存在するのか、これはよく分からないのですが、少なくとも関東地方から中部地方の山岳地帯にかけて非常に広く分布していることが言えます。

ここから少し複雑になってまいります。どうも私たちは道祖神ということでサイノカミも、つまりセーノカミもドーロクジンも一緒くたに考えています。まさしく現代人はそういう考え方をしています。実は私も農村部で生まれ育って道祖神祭をやってきましたので、私にとってもセーノカミ、サイノカミとかドーロクジンと言ってもみんな道祖神なんだという感覚で全部とらえていました。ところが、このように調べてまいりますと、これだけ根強くサイノカミ、セーノカミという言い方が残っていますから、そのサイノカミ、セーノカミという神と、ドーロクジンという神とは、本当に一緒のものとして考えていいのかということから、もう一度考え直さなければならないのではないかと思います。それでは歴史的に見ていった場合、この違いがどうなのかということについては最初におこたわりしましたように分かっていません。

例えば長野県の下伊那郡阿南町に新野というところがありますが、ここは新野の雪祭りとして知られているところです。この新野で見てまいりますと、サイノカミというのは峠にお祀りする神さまです。それで、サイノカミというのは「長い旅をしてきたもんだから足が悪い」ということを言うのです。片足が悪いということを言っています。そして、道祖神というのは、道の神さまだといひます。つまりサイノカミと道祖神

は違うんだと言っています。さらにドーロクジンというのがある、それは氏神として、つまり屋敷神として祀るんだと言っています。

ですから、どうも私たちはセーノカミとドーロクジンもすべて道祖神と同じものだというように思っていますが、この分布図を見たり、さらに一方で大磯町などで道祖神とをセーノカミと言っているということから考えますと、ひょっとしたら元々はドーロクジンとセーノカミは違うものだったのかも知れません。でなければ、新野のような区別は生まれないのではないかと思います。ちょっと混乱をしたいと思いますけれども、皆さんに分かっていただきたいのは、歴史的に調べ、さらに全国的な様相を見てまいりますと、どうも道祖神の中にもいくつかの系統があるかも知れない、そのように思って研究をした方がどうも良さそうだとことです。また、こう考えていきますと、道祖神が何の神さまなのかと皆さんにお尋ねしますとほとんどが境の神、つまり自分たちの集落に悪いものが入ってこないようにお祀りする神さまと言っていますが、それも怪しくなってきます。本当に道祖神の元々の姿というのは、こういうものとして考えていいのだろうかという疑問が出てくるわけです。

これから少し歴史的な文献を見てまいります。様々な資料の中で道祖神という言葉が、あるいは語句がいつから確認できるのかということ調べてみますと、12世紀の前半、つまり1100年代の前半から読みはともかくこの語句が出てまいります。『今昔物語』の中にもこの神が登場してまいります。例えば『今昔物語』の巻13の中に、「天王寺の僧、道公」という坊さんのことが記されているところがあります。長くて少し分かりにくいかも知れませんが読んでみます。

今昔、天王寺ニ住ム僧有ケリ、名ヲバ道公ト云フ。年末、法花経ヲ讀シテ佛道ヲ修業ス、常ニ熊野ニ詣テ、安居ヲ勤ム。

而ルニ、熊野ヨリ出テ、本寺ニ返ル間、紀伊ノ國美奈部ノ海邊ヲ行ク程ニ、日暮レヌ。然レバ、其ノ所ニ大ナル樹ノ本ニ宿ヌ。夜半許ノ程ニ、馬ニ乗レル人、二三十騎許未テ、此ノ樹ノ邊ニ有リ。「何人ナラムト」思フ程ニ、一人ノ云ク、「樹ノ本ノ翁ハ候フカト。」此ノ樹ノ本ニ答テ云ク「翁候フト。道公、此レヲ聞テ、驚キ怪テ、「此ノ樹ノ本ニ人ノ有ケルカト」思フニ、亦、馬ニ乗レル人ノ云ク、「速ニ罷出テ、御供ニ候ヘ」ト。亦、樹ノ本ニ云ク、「今夜ハ不可參ズ。其ノ故ハ、駄ノ足折レ損ジテ乗ルニ不能ザレバ、明日、駄ノ足ヲ洗ヒ、他ノ馬ニマレ求テ可參也。年罷老テ行歩ニ不叶ズ」ト。馬ニ乗レル人々、此レヲ聞テ、皆打過ヌ、ト聞ク。

夜睡ヌレバ、道公、此ノ事ヲ極テ怪ビ恐レテ、樹ノ本ヲ廻リ見ルニ、惣テ人無シ、只道祖ノ神ノ形ヲ造タル有リ。

ここにサエノカミが出てまいりまして、「道祖」という字をあてています。

其ノ形、旧ク朽テ多ノ年ヲ経タリト見ユ。男ノ形ノミ有テ、女ノ形ハ無シ。

男の形、女の形、これは何を意味しているのかといえ
ば、男の像、女の像と理解できます。実は、『扶桑略記』
とか、もっと古い時代のものを見てまいりますと男女
2神ということで道祖神が出てくる場合があります。
おそらく『今昔物語』の場合も男の像、女の像とい
うことです。古くなってしまっているのもう女性像
はなく、男性像だけになっているというのです。
そして、

前二板ニ書タル 絵馬有り 足ノ所破レタリ。道公、此レヲ見テ、「夜ルハ、
此ノ道祖ノ云ヒケル也ト」思フニ、

どうも馬で来た人たちに返答した翁というのは、この
サエノカミだったわけです。

弥ヨ奇異ニ思テ、其ノ絵馬ノ足ノ所破タルヲ糸ヲ以テ綴テ、本ノ如ク
置ツ。道公、「此ノ事ヲ今夜吉ク見ム」ト思テ、其ノ日留テ、尚、樹ノ本ニ
有リ。夜半許ニ、夜前ノ如ク、多ノ馬ニ乗レル人來ヌ。道祖、亦、馬ニ乗
テ出デテ共ニ行ヌ。

つまり道公が絵馬を直してあげたので、その晩はサエ
ノカミが、その絵馬の馬に跨がって出ていくことがで
きたというのです。

暁ニ成ル程ニ、道祖返來スト聞ク程ニ、年老タル翁來レリ。誰人ト不知ズ。
翁というのは神です。日本の神像をみてまいりますと、
男性は翁になると確実に神になる。つまり日本人が神
というものをどのように意識したのかを見ていきます
と、像にあらわしていることが多いといえます。姿形
をつくるわけです。絵に書いたり、あるいはお面もそ
うですし、能をやる方はご存じでしょうが、必ず翁が
出てきますが、これは神としての表現です。

道公ニ向テ拝シテ云ク、「聖人ノ昨日駄ノ足ヲ療治シ給ヘルニ依テ、翁、
此ノ公事ヲ勤メツ。

此ノ思難報シ。我レハ此レ、此ノ樹ノ下ノ道祖此レ也。此ノ多ノ馬ニ乗
レル人ハ行疫神ニ在マス。

國ノ内ヲ廻ル時ニ、必ズ翁ヲ以テ前役トス。

サイノカミを前役＝先導役として行疫神が国々をめぐ
るということを言っています。

若シ、其レニ不共奉ネバ、咎ヲ以テ打チ、言ヲ以テ罵ル。此ノ苦、實ニ
難堪シ。然レバ、今、此ノ下劣ノ神形ヲ棄テ、速ニ上品ノ功德ノ身ヲ得ム
ト思フ。其レ、聖人ノ御力ニ可依シト。

今読みました『今昔物語』というのは、日本と中国と
インドの説話を集めたものです。もちろん今読みまし
た道公の話は日本の物語で、『本朝法華験記』から採
録されたものです。『本朝法華験記』という書物がで
きましたのは長久年間といえますから1040～1044年
の間です。これは法華験記という言葉から分かります
ように、法華経のありがたさを説いたものです。験とい
うのはご利益という意味と考えるとござっていいと思
います。そして、本朝とは日本という意味です。仏教
は中国から来たものですから、本朝という言葉をつけ
ないとかどうか分からないわけです。つまり、法華

経というものを一生懸命信仰して唱えたと、必ず功德
があるということを、この本は言っています。その物
語のひとつとして、今の道公の話が出てくるのです。

「道祖」と書く神が出てくるのは、文献の上から見
てまいりますと『今昔物語』が、さらに『本朝法華験
記』というものが最も古いということです。では、も
っと古い文献ではどうなのかといえますと、例えば8
世紀の『古事記』では、ツキダテフナドノカミとい
う名前が出てきます。8世紀初めの『日本書紀』にもク
ナドノカミと示しています。『古事記』にしても『日
本書紀』にしてもフナドノカミ、クナドノカミとい
う神名で出てくるのが、後の道祖神に相当する神のよ
うなのですが、どうもこれは確証がないのです。まあ、
これが最も近いのではないかとということです。です
から、明治期以降に作られた道祖神にこの名前を彫
った塔があつたりするわけです。これは何かといいま
す明治時代というのは『古事記』とか『日本書紀』を基
にして国家神道というものが盛んに言われた時代です。
つまり、記紀の神話から日本の神々を整理するとい
う時代です。これは国策に基づいて行われました。私
たちの身の回りにある神社の神々に神名が与えられた
というのがその時代です。道祖神でも国家神道を基に
して記紀神話から近いものを石塔に彫り始めたのは明
治以降だと思つていいわけです。

10世紀前半の『和名類聚鈔』をみていきますと、「岐
神」の語句にフナドノカミとルビがあります。さら
に「道祖」と書いてサエノカミ、さらに「道神」と書
いてタムケノカミ。だからこのようにみてまいります
と、3つの神が混同してきます。これは同じ神名を持
った、同じ性格を持ったものなら、こんな分け方をし
ないのではないのでしょうか。この時代にこのように
言い分けているところにやはり何かひとつの大きな
意味があるのではなからうかと思うわけです。

先程から、もう何度も繰り返して申し上げてまし
たように、道祖神といいますが私たちはひとつの
ものだと思つてしまっていますが、どうも各地の名
前からみていくといくつかの流れがありそう
だ、その流れというのは、文献で具体的なことを
確認していくと、最も典型例は『和名類聚鈔』に
3つの神が出てきます。では、この3つの神とい
うのはどういう関係を持ったものなのかとい
うことです。そして、その具体的な内容
はどのようなものであるのかということが大きな
問題として残ってきます。

予定の時間を過ぎていますが、もう少しお時間を
いただいて先を急ぎます。これから本論に入るよう
で、

たいへん申し訳ないのですが、道祖神祭についてかい摘んで話を進めてみたいと思います。

実は今度指定された大磯の道祖神の祭りを見てまいりますと、そこにはいくつかの特徴的な事柄が含まれているのが分かってきます。そもそもこの地域の道祖神の祭りというのは、極めて複雑な様相をもっているというのが大きな特色です。その複雑さはどこから出ているのかといいますと、小正月の火祭り、つまり1月14・15日にお飾り類を集めて大きな火を焚く行事と道祖神の祭りというのは本来別のものです。なぜそんなことが分かるのかと申しますと、道祖神の祭りをしていないところ、道祖神というのを祀っていないところでも小正月の火祭りは行われています。例えばどういう名前ですぐそれが行われているのかというと、九州ではホッケンギョウとかオニビ、そして、中国地方から近畿地方にかけてはサギチョウと呼びます。サギチョウという言葉は皆さんもご存じだと思うのですが、平安時代の文献から出ています。字は「左義長」でもいいですし、あるいは「三稜杖」でサギチョウと読ませます。サギチョウという言葉は本来どういうものかという、棒を3本立てて三角形のような形を作ることを行います。お間違えにならないようにしていただきたいのは、ある特定の行事のことを言うものではありません。ですからお飾りなどをこういう形に積むものだから、小正月の火祭りのことをサギチョウと呼ぶようになったわけです。そして、中部地方から関東地方にかけてはサイトバライということです。あるいは近年ではドンドヤキ、ダンゴヤキなどとも呼ばれます。ドンドヤキという言葉は、今、急速に広がっています。ドンドヤキという言い方は新しい言葉なんだろうと思います。大磯でもそうですが、年配の方々にはみんなセートバライというようにおっしゃるはずで。私たちは、子どもの時はダンゴを焼いて食べるのでダンゴヤキと呼びましたが、年寄はセートバレーと言っていました。そして、関東地方の北部、例えば茨城県とか福島県、浜通りの南部は鳥追い。害鳥を追う行事です。このように全国的に見てまいりますと小正月の火祭りは様々な呼び名があって行われています。

そして、先程見ていきました道祖神の名称の、ドーロクジンという名称をもっている地域では、四国を除いて、小正月の火祭りと道祖神の祭りが重なっているのです。だから、道祖神自体も全国的に見ていきますと、この地域は極めて特異だといいましたが、さらに加えてお飾り類を燃やすことを道祖神の祭りだと考えているのも、やはり同じ限られた地域でみられるといえます。他の地域では道祖神を祀ることと、お飾り類

を集めて燃やすというのは一緒ではなく、別々のものになっています。したがって、大磯の左義長が文化財に指定された理由も、全国的に特異なこの関東地方から中部地方の山岳地帯にかけての、そのひとつの典型例が大磯ということなのです。

さて、大磯の道祖神祭りの特徴を私なりにまとめてみますと、まずひとつは一番息子の行事があります。12月8日に、子どもたちが五輪塔の一部、あるいは俵形の石を持って各家を回って賽銭をもらって歩く。たぶん、この名称は大磯だけにしかないと思います。他に聞いたことがありません。一番息子、2番息子……こういうことを言って祝言を言って歩く。

そして、1月11日が松買。これにはオンベ竹が結びついています。オンベを立て、オカリヤを作る、そして、オカリコといまして昔は子どもたちが3日くらい籠もるのです。おそらくかつてはそこで寝泊りしたのでしょう。さらに、子どもたちが各家を回って歩くというわけです。そればかりではなくて、若衆たちが新婚の家庭を回って歩きました。大根とか野菜類で男女の性器の形を作り、それを新婚の家庭に持って行きます。それをもらった新婚の家では一晩床の間に飾っておきます。もちろん、これは子授かりを願うための行事です。子どもが授かるようにということで若衆がそういうことをしました。

そして、ナナトコマイリ。これは数字の7です。さらにサイト立て。昭和37年に県で出版したものをみますと、うず高く三角錐に盛り上げたものを、サイトといっています。実は東京の西部から山梨県へ行きますと、お飾り類を三角錐に盛り上げたものをサイノカミと言っています。ここではお祀りしている石の道祖神のことではなく、お飾りを積み上げたものをサイノカミといい、サイトバライ（セートバライ）というのはこれを燃やすことです。

大磯の特徴としては、それからサイトバライの囃したたてがあります。今ではもうやっておられないんだろうと思うのですが、火をつけて燃え上がっているときに「ドウミドンヤ……」と囃したてました。私はどう発音をするのか分かりませんが、いくつかの囃し言葉がありました。

それと綱引きです。今、ヤンナゴッコという名称で有名になっています。それから屋台の引き回し。屋台を引いて歩くことを今でもやっていますでしょうか。大磯より西へ行くとすごく盛んです。山北町などは町をあげて屋台を引き回しています。

ダンゴを焼いて食べたり、火にあたるとカゼをひかない、燃え残しを家に持ち帰ってどこかへ立てておく

と泥棒が入らないなど、この火には呪力があると考えられています。さらに、もうひとつ、なぜセトバライをするのかという伝承があります。実は大磯町では伝承は断片的になっているようですが、二宮、平塚、秦野などに同じ伝承があります。12月8日に目一つ小僧（一つ目小僧）が各家を回って歩く、そのときに各家に悪事をなした者がいると帳面につけていく、この帳面を目一つ小僧が道祖神に預けていきます。これが12月8日のことです。そして2月8日に取りに来るからそれまで預かってくれと言われ、道祖神は困ってしまう。

昭和37年の報告を見ますと、大磯では子どもの神として道祖神をお祀りしていると書いてあります。ですから、何も境界で悪いものが入ってくるのに対処して祀るというのではありません。で、このことは神奈川県から静岡県伊豆にかけての沿海地域に非常に濃厚に伝えられています。これは決して特殊なことではなくて、海に近いところでは子どもの神として伝承しています。だから、例えば子どもが行方不明になったときどうするのかと言いますと、道祖神のところへ行ってどこにいるかお尋ねする。伊東あたりでは「迷い子は道祖神に聞け」と言うそうです。

さて、帳面を預かった道祖神は困ってしまった。目一つ小僧に返したら何か悪さをするだろう。しかし、どうやって口実を作ろうかと考えて、自分の家を燃やすことを思いつく、それがセトバライの始源だという伝承です。で、これは先程言いましたように、大磯の町内では、昭和40年代の初めにはほとんど伝承がなくなっています。ところが、まわりの地域を見ますと、この伝承は濃厚に残っています。なぜ、大磯でこれが消えたのかということ、それなりの理由があります。その予測は後でちょっと申し上げますが、こういうふうに見てまいりますと、いくつか注目すべきことがあるわけです。まず分かっている事柄から説明をいたします。

ここでは左義長という言葉を使っておきますが、大磯の左義長として伝承されている内容を見てまいりますと、例えばオンベ竹を伐ってきてオンベを立てるといのは、分布地図にありますように相模川から西の地域だけにしかありません。平塚では須賀で見られます。須賀では天井の高さぐらいの巨大な幣束を作ります。これをオンベと言います。「あの人はオンベかつぎだ」という言い方は、年配の方々ならお分かりになると思います。何か縁起ばっかりかつぎような人のことです。オンベというのは御幣という意味で、オンベを立てるといのは、平塚の海岸地帯から大磯、二宮、

小田原、秦野など神奈川県内の西部地域、そして津久井郡と川崎に見られます。オンベの分布から言えることは、津久井郡や川崎のオンベは、これは明らかに山梨県から甲州街道沿いで伝わってきていると思います。それで、平塚、大磯など神奈川県西部にあるオンベの伝承というのは、山北、御殿場を越えて、そして山梨県へつながります。ですから、山梨県が発祥であるというわけではないのですが、文化の在り方から見ていくと、山梨県から甲州街道沿いに東京方面へオンベを作る地帯があって、さらに山梨県から御殿場、山北を経て神奈川県西部の海岸地帯までオンベを作っている地域があります。オンベを見てみますと、湯河原町や南足柄市など、大磯より西の方がちょっと大きくなっていますか、手のこんだ作りをしています。大磯の場合には、かなり簡略化されたものが伝承されているということもできます。

そして、大磯では写真にありますように道祖神の仮宮を作り、ヤンナゴックンといって引き回します。これは元は綱引きのようで、大磯の道祖神祭を考えると、これは重要な意味を持ちます。しかし、これをどういうふうに理解していいのかわかっています。その迷いというのはどういうことなのかと言いますと、神奈川県の大磯以西の地域から静岡県の三島にかけて、セトバライのときに屋台を出して引き回すということがすごく盛んに行われています。今でも山北町などでは屋台を組み立てて、その上へ太鼓を載せて子どもたちが叩いて、旧山北町の各町内の屋台が集結してきます。山北町の場合は、この部分だけが大きくなって伝承されていますが、それははたまた大磯以西では屋台を引き回すというのは盛んに行われています。

大磯町の綱引きを見てまいりますと、仮宮を綱の中に入れて引いております。それで私が迷っていますのは、これが屋台の変形なのかどうかということです。屋台を引いていたのがこういう形を新たに作り出したものなのかどうか、そこが分かりません。ひとつの考え方は、屋台を引いていたのが、お宮をひくようになったという考え方です。しかし、もうひとつ考え方があって、それは純然たる綱引きが元の姿という考え方です。綱引きというのは、皆さんは運動会でやるんだとお思いになっていらっしゃると思うのですが、本来の綱引きというのは占いです。大磯でも陸方と浜方に分かれて引くわけです。実は、これは割りと綱引き本来の姿を留めているといえます。日本の中で綱引きというのを調べてまいりますと、九州から南西諸島にかけては8月の十五夜に綱引きをして、占いをしています。ところが東日本では、占いとしての綱引きという

のは1月14日か15日です。どこにでもあるという行事ではないのですが、東北地方の秋田県仙北郡西仙北町には国の指定を受けている大綱引きがあります。町中が二手に分かれて雌綱と雄綱を結び合わせて引き合います。これは雪の中で行います。日本の中で見てまいりますと、九州から西南日本では8月15日の十五夜、そして東日本では1月の小正月のときに綱引きをやっているわけです。ですから大磯のヤンナゴッコが本来綱引きであるということをおおしくありません。ところが町内によっては、調査記録を見てまいりますと、屋台に道祖神の仮宮を載せて引き回したところもあります。そうすると屋台からこれに変わったということも全く可能性としてはないわけではないだろうと思います。どちらかはまだ結論が出ていません。

それからナナトコマイリ。これも決して特別なことではなくて、平塚でも言いますし、あるいは藤沢あたりで見ますとナナサバマイリというのがあります。境川沿いにはサバ神社という神社があるのですが、7つのサバ神社をお参りすると無病息災がかなえられるといいます。平塚ではナナトコマイリといって、お正月に7つの鳥居をくぐるとやはり無病息災がかなう。あるいは言うまでもなく、皆さんもよくご存知のように七福神というものもあります。あるいは、国府祭のときにも国司を迎える行事として「七度半の使い」というのがあります。「七度半の使い」は、非常に古い作法です。つまり、7という数字は特別な意味を持っていて、おそらくその辺の感覚がナナトコマイリというものになっていると思われます。

そもそも指定された大磯町の左義長は、要するにこの地域の小正月のセエトバライの典型的なスタイルをもっているというのが特色です。ですから周辺地域でも行われていることが中に入っているのは当然のことなのです。ここだけ特別、突飛なことをやってたら指定にならない。この地域の民俗文化の典型例を伝えているから極めて重要だということです。だから私が、これは他でもやっていますよと言っているのは、これは決して軽んじて言っているわけではありません。

ナナトコマイリから何が分かるのかと言いますと、7つの神をお参りするというのが、日本人にとってすごく重要な意味を持つんだというのが明確にここに示されているわけです。では、なぜ7なのかということが次の問題になりますが、そこまでいきますとまたややこしくなりますので次に進みます。

火をつけて囃したてるということがなわれていますなぜそんなことをするのでしょうか。「ドウミドンヤ」というのが坂下や浜之町、大泊のことばとして伝えら

れています。そして、平塚に近い方へまいりますと言葉が違いまして、「アラネーチ、オーイネ」と、発音はよく分かりませんが、火が燃え盛っている最中にそういうふうに囃したてることが調査報告に出ています。囃し言葉が本来どういう意味であったのかということをお明らかにするのは、たいへん難しいのですが、この燃え盛っているときに囃したてるというのは、セエトワライといって、茅ヶ崎や藤沢にも濃厚に伝えられています。茅ヶ崎の海岸部や藤沢の鶴沼などでは火が燃えているときに「道祖神が丸焼だ」と誰かが囃したました。年配者ですね、きっと。そうすると、そこにいる人たちがみんなで大笑いするわけです。大磯の囃したてもおそらくそれと近いものです。火に向かって囃したてることは、実は相模川から東しかありません。それを大磯では伝承していることになります。それで注目されるのは相模川から東でも海岸地帯ですので、海伝いの文化として何か連絡があったということをお考えた方がいいと思います。こういう意味でも、大磯の左義長はこの地域のセエトバライの典型例ということです。相模川から東のことも中に取り込んで、ある時代まで行っていたということです。

さらに、このことは各地で言いますが、門松をセエトバライで燃やし、その焼け杭を持ってきて、玄関先に立てると泥棒が入らないとか、いろいろなことを言います。あるいはダンゴを交換して食べることも、内陸部へ入りますと行っているところが多くあります。特に藤沢の北部から高座郡あたりでは焼くダンゴは3つに決まっています。大磯周辺地域ではもっとたくさん焼きますが、そのダンゴを食べるとカゼをひかないとか、いろいろなことを言います。これも各地のセエトバライでよく言われています。

もう少し見ていきますと、大磯では若衆が野菜で男女の性器を作って、それを新婚家庭に持って行きましたが、これは平塚でもやっていたし、今でも伊勢原でやっていると思います。伊勢原市日向に藤野という集落がありまして、そこでは1月14日に年配者がダイコンやニンジンなどを使って男女の性器を作って道祖神のところへお供えし、新婚の家庭に持って行き一晩置く、そうすると子どもが授かるといいます。

子どもたちが家々を回るオカリコという訪問ですがこれは先程言いましたように私も体験があります。火をつけて燃やす前ですけれども、お飾りや薬を集めて回りました。秦野市西大竹では「道祖神の石売り」というのがあります。これはセエトバライが済みますと子どもたちが道祖神の石塔とか、そこにある五輪塔のかけらをリヤカーに積んで、町内の家へ1軒1軒売り

歩きます。確かこの写真を撮りに行ったときは、道祖神石塔が3000円、ゴロ石ひとつが500円でした。どういう家がこの写真を買って求めるかという、「どうも去年うちは病気がちだった」あるいは「去年、子どもが生まれた」「孫ができた」というお宅です。そして、一晩家の床の間でお祀りし、翌日もとの場所へ返します。

秦野市のもう少し西の方では、子どもたちがお面をつけて、紙で作ったいろいろな装束で家々をお祓いして歩きます。私自身の体験をいいますと、私の住んでいるところでは子どもたちが道祖神の小屋の中へ入って、赤ん坊を連れとお母さんがお参りに来ると、「痲疹も軽く、麻疹も軽く、悪魔っ払い、悪魔っ払い」と言って、幣束で祓ってやる、そうすると50円とか、いくらかの賽銭がもらえました。このお金は大將が自分の権限でいように分けていました。このお祓いのことを、昔はどうやっていたのか聞くと、お面をつけて1軒1軒全部回ったといっています。それが私たちの時代にはもう回らなくなって、お参りにくる人をお祓いするようになっていたのです。ですから、このオカリコのような、あるいは若衆が1軒1軒回るような行事は、どうもこの地域では様々な形でやっていたということが窺えます。

お手元の分布図にあるように、神奈川県内では相模川から西の地域で子どもたちが1軒1軒祝いごとを言って回ることが行なわれています。そして、道祖神の石売りは平塚の北部、秦野の東部、伊勢原の南部からどうやら綾瀬に分布しています。大磯ではこういうことはなかったようですが、ひょっとしたら一番息子と言われる行事が、この道祖神の石売りあるいは道祖神のお籠もりという言葉で言っている行事とつながりがあるかも知れないという予測を持っています。なぜ大磯の場合12月8日になったのか分かりません。しかし、ゴロ石を持って回りますから、西大竹のものと何か近いような気がします。それぞれの土地で長い歴史の中で独自の展開をしてきた結果が、今のような形なのかなと考えています。

ゴロ石についてはかなり重要な問題だと思います。ゴロ石というのは五輪塔の一部です。これをゴロ石と呼ぶ地域はかなり広範囲です。平塚の須賀も、ちょっと漁師町で荒っぽくて、セトバライの盛んなところですが、気にいらぬ家があると、これを投げ込むのです。さっきの西大竹の逆なのです。お祭りをやっても寄付をくれないなどの気に入らぬ家があると、お祭りのときに神輿を暴れ込ませる。セトバライのときにはゴロ石を投げ込んでしまう。そうすると、その家から病人が出ると言われています。なぜかという

これは墓石で、祟りがあるということです。「さわらぬ神に祟りなし」の、ちょっと触りたくないものだという感覚なのです。要するに疫病神的なものです。だから、須賀ではこれを投げ込まれると悪いことが起こると言っているのです。ところが、日本人の持っている神信仰の極めて都合のいいところでもあり、特異なところなのですが、この荒ぶる神を積極的に祀ることによって、自分たちの強い味方にするという考え方があります。例えば、菅原道真。太宰府に冤罪で流されて非業の死を遂げる、そうすると、京では要人が訳も分からず死んでいく、そこで北野天神が祀られます。つまり祀り込めることによって荒ぶる神が自分たちの大きな力になるわけです。

小田原の石橋にある佐奈田神社や平塚の真田にある真田神社は、真田与一が石橋山の合戦で喉に痰が詰まり、味方に殺されるという非業の死、怨念を持って死ぬ、だから、その人を積極的に祀ることによって佐奈田神社や真田神社は喉とか痰などに効くという、人間にご利益をもたらしてくれる。こういう神が『今昔物語』の中に出てきた行疫神です。ですから、神奈川県中央南部のゴロ石を使った行事の中でも、『今昔物語』の行疫神とセエノカミの結びつきがうかがえるわけです。それが具体的には一番息子であり、西大竹の石売りであり、あるいは平塚や伊勢原で行なわれているゴロ石を一晩祀るといような行事です。要するにゴロ石自体が行疫神のひとつの象徴的なものと考えられてきたといえます。ゴロ石をもって家々を回することは、1軒1軒を強い力を持ったものによってその災厄を祓い鎮めていくということになります。先程の繰り返しですけど、一番息子とゴロ石を家で祀ることは極めて同じような意味を持ったものとして理解できます。ただ、一番息子のような形で行っているのは大磯町だけです。なぜ12月8日なのかということについては、これはひとつの予測でしか過ぎないですが、大磯ではセトバライの由来として目一つ小僧との関係を説くという伝承が極めて薄いと言いましたけれども、これはおそらくゴロ石を使った行事とセトバライの始源を説く目一つ小僧の伝承が結びついてしまった結果ではないでしょうか。ところによっては、目一つ小僧のことを疫病神と言っていますし、その疫病神が12月8日に訪れると言っています。目一つ小僧や疫病神の伝承と、ゴロ石の行事が結びつき、ゴロ石を使った行事が12月8日に移っていった、その代わりに目一つ小僧との関係を説くセトバライの由来伝承が消えていったという推測をしています。

(國學院大学文学部助教授)

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。館へ直接お問い合わせください。

▼夏季企画展

『相模湾の貝類Ⅰ 大磯海域にすむマキガイ』

7月12日(日)～9月6日(日)

町史編さん事業によって収集された貝標本を中心に、多くの方々からご寄贈いただいた館収蔵資料を含めて展示しています。ぜひご覧ください。

▼秋季企画展

『日本列島 絵はがき紀行』

10月18日(日)～12月6日(日)

はがきや古写真で、なつかしい日本の風景を旅してみませんか。



夏季企画展 展示資料より

【資料の受入】

(寄 贈) ご協力ありがとうございました。

- 高 麗 青木 貞雄氏 裱
- 大 磯 木村 純子氏 書籍、蝶標本 他
- 大 磯 鈴木 昭三氏 茶箆筭
- 大 磯 四ツ谷スミ氏 看板 他
- 大 磯 加藤 耕造氏 看板
- 大 磯 山口 善章氏 徳利
- 大 磯 飯田 善雄氏 手拭い、鬘斗
- 大 磯 西海 誠 氏 版木 他
- 大 磯 斉藤安之助氏 タキツケ
- 大 磯 奥野和三郎氏 鑑札
- 大 磯 尾崎 芳治氏 衣類一括 他
- 大 磯 関野 浪子氏 時計
- 大 磯 真壁 清一氏 消防の刺子 他
- 東 町 渡邊 恵子氏 ビール壺
- 東 小 磯 駿東多津子氏 書籍
- 西 小 磯 鈴木 誠一氏 風呂敷
- 西 小 磯 後藤 鶴子氏 蚊帳 他
- 国府本郷 山本 和恵氏 書籍
- 寺 坂 山田 正明氏 牛車の車輪
- 平 塚 市 今井きみゑ氏 櫛
- 二 宮 町 畠山 恵子氏 モンペ 他
- 二 宮 町 西山 敏夫氏 ヒゴノカミ 他

(移 管)

大磯町役場経済観光課 レコード

(購 入)

すりもの堂書店 絵はがき 他
西田書店 古地図

(寄 託)

- 大 磯 宮代 治吉氏 稲荷講資料一括
- 大 磯 菊池なつみ氏 菊池重三郎資料一括
- 西 小 磯 戸塚 浩 氏 稲荷講資料一括
- 西 小 磯 高木とみ子氏 掛軸
- 西 小 磯 中村 晴夫氏 稲荷講資料一括
- 国府本郷 添田 佐助氏 クロッカスガーデン看板
- 月 京 山川 正 氏 書籍
- 月 京 後藤 勲 氏 古文書一括
- 黒 岩 守屋 町子氏 古文書 他
- 黒 岩 坂井 保治氏 高札
- 平 塚 市 加藤 文八氏 古文書
- 横 浜 市 田川 順三氏 雛人形一式
- 横 浜 市 飯島 成三氏 書籍 他
- 裡道区 獅子頭一対
- 西小磯東区 伊藤博文資料一括
- 西小磯東・西区 古文書 他
- 西小磯西子ども会 七夕資料 他
- 大磯中学校 吉田茂資料 他

〈寄託期間：H10.4.1～H12.3.31〉

Report—大磯町郷土資料館だより—No17

平成10年8月15日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005 神奈川県大磯町西小磯446-1

T E L 0463 (61) 4700

F A X 0463 (61) 4660